

異世界でCook of Creation
創造の料理人してます

Maikaze Shin

舞風 慎

3

ドリ

おしゃべりで
食いしん坊な
森の妖精。

ミカン

アルノ村の少女。
村で一番の
料理上手。

カイト

ふさふさ尻尾と
垂れ耳が特徴的な
犬族の少年。

マイ

しっかり者な
アライグマ族の
女の子。

エリ

狐族の女の子。
ジンの妻として
旅に同行する。

クウガ

元気いっぱい
生意気な
豹族の少年。

フドウ シン

異世界を巡る旅に
出た、地球出身の
若き料理人。

Isekai de Sozo no Ryorinin Shitemasu.

CHARACTER

1

俺の名前は不動慎^{ふどうしん}。料理人だ。

ある日、仕事が終わっていつものようにベッドで寝ていたはずの俺は、いつの間にか異世界に迷い込み、森の中で立ちつくしていた。そこに偶然通りかかったAランクの冒険者兼料理人であるスズヤさんが案内してくれたのが、ここ、料理の聖地と呼ばれる街だった。

創造召喚^{そうぞうしょうかん}という、地球のものをなんでも持つてくることができる魔法と、無限のMP。この二つのチートをいつの間にか手にしていた俺は、地球で経営していた自分の店を丸ごと召喚し、この街で営業を始めた、というわけだ。

さて、そんな俺は今、料理の街の大通りを歩いている。そして隣を歩くのは、ご機嫌^{きげん}な様子^{きつね}で狐耳^{みみ}を動かしながら尻尾を揺らす、俺の妻のエリだ。

彼女は元々、従業員確保のために購入した奴隷^{どれい}だった。戦闘が得意な狐族^{きつねぞく}出身の獣人^{けうじん}なのだが、一族で落ちこぼれ扱いされていた彼女は家族に捨てられ、奴隷になってしまったらしい。そんな境^{きよう}

遇にあつた彼女を俺が購入したわけだが、可愛い笑顔と丁寧な接客で、あつという間に店に欠かせない中心メンバーとなった。

「シン様、まずはどこへ向かいましょうか？」

エリがこちらに顔を向けて尋ねかけてくる。

「そうだな……まずは予定通り、防具屋に向かうことにしよう」

俺の言葉に、エリは笑顔で頷いてくれた。

何故防具屋に向かうのかというと、これから俺たちはこの料理の街を離れて、旅に出るからだ。

俺がこの世界に来てそれなりの時間が経ったが、この世界の食材を使った料理は、実はそんなに作っていない。

店を出していた料理の多くは、地球のレシピと地球の食材で作ったものだ。リンゴに似た果物であるモンスターフルーツを使ったモンフルヨーグルトや、ムーンベアを使ったムーンベアの赤ワイン煮など、異世界食材と地球レシピを組み合わせたメニューもあるにはあった。ただ、その種類は多くなかった。

せっかく異世界にいるのだから、この世界にしかない食材を使って、もっと美味しい料理を作りたい。

そう考えて、旅に出ることを決めたわけである。

「それにしても、ルミにお店を任せてしまつてもよかったのでしょうか。アカリさんもいるので大丈夫だとは思うのですが……」

エリが不安げな表情を浮かべながら呟いた。

ルミとアカリというのは、俺たちが旅に出るにあたって、店を任せてきた従業員の名前だ。

ルミは、冒険者として従業員募集の依頼を受け、俺の店で接客員として雇うことになった猫耳族の女の子。いつも元気いっぱいなのだが、少し抜けているところがあるので、同じ接客員だったエリとしては不安なのだろう。

アカリは、この世界で三人しかいなかったレベル4の魔法の使い手にして、その中でも一人しかない空間魔法の使い手だ。うちの店で食べたオムレツに一目惚れして、俺に弟子入りを志願してきた。初めのうちは慣れない地球のレシピを覚えるのに苦戦しているようだったが、みるみるうちに成長し、今では副料理長として、俺たちが旅に出ている間の厨房を任せられるほどの実力をつけている。

「二人ならきつと大丈夫だ、他の従業員もいるしな。それに、いつだって空間魔法で戻ってこれるんだから、そんなに心配しないでもいいさ」

俺はそう言ってエリの肩を叩く。

現在の俺の店では、ルミとアカリ以外に、合計五人の従業員を雇っている。よほどのことがない

限り、営業できなくなるようなことはないだろう。

それに、今の俺はアカリに教えてもらった空間魔法を覚えている。かなり特殊な発動方法なので、俺とアカリ以外で空間魔法を使える人間はいないはずだ。

その空間魔法には、物を別空間に収納するという能力以外に、一度足を運んだことのある土地のみという制限はあるが、MP消費量に応じた距離だけ、一瞬で移動できるという能力がある。そして俺のMPは無限なので、どんなに遠くにいたとしても、いつでもこの料理の街に戻ってくる事ができるのだ。

「……それもそうですね。皆のことを信じましょう」

エリはそう言ってもう一度頷いた……確かに俺としても、店がトラブルに巻き込まれないか心配ではある。

そうそう、トラブルといえば忘れてはいけないのは、地球から召喚された勇者シズカとその一行が店にやってきたことだな。

彼女は魔法都市アンセルブルで召喚された勇者で、俺と同じ日本の出身の黒髪美少女だ。

魔王討伐のため、俺に弟子入りしていたアカリにパーティに入るよう勧誘しに来たのだが、俺もアカリも拒否したことで、何故か決闘することになってしまった。最終的には俺たちが勝利して、勧誘を諦めた勇者たちは魔王を倒すために街から出て行ったんだけとな。

アカリがレベル4の魔法使いである以上、また似たようなことが起きてもおかしくはないんだよね……まあ、アカリのことだから大丈夫だとは思うけど。

そういう話しながら歩いているうちに、俺たちは防具屋の前に辿り着く。

この防具屋は大きい店ではないが、俺のレストランに来ていた冒険者が度々話題に出していた店なのだ。

冒険者というのは、ギルドから依頼を受けてモンスター^{モンスター}の討伐や素材の収集、旅人の護衛などを行う、この世界ならではの仕事だ。俺も冒険者としてギルドに登録しており、現在ではBランクにまで上がっている。

そんな俺の今の格好は、この世界に来て少しした頃に買った装備で、防御力がかなり低い。そもそもエリにいたっては、ちゃんとした防具ですらなく普段のメイド服だ。一応これで狩りに行ったこともあるにはあるが、長旅となると危険な目に遭うこともあるだろうから、ここでしっかりしたものを買っておきたい。

何よりも安全に旅を終えることが一番大事だからな。

俺とエリは、迷いなくその防具屋に入る。

お金はたんまりあるから、ケチケチせずに性能のいいものを買おうと思っていた。

俺が欲しいのはいわゆる軽装備のものだ。基本的には創造召喚魔法で持ってきた拳銃^{けんじゅう}を武器に、

機動力を活かして戦うのが俺のメインの戦闘方法になる。というわけで、フルアーマーなどの重くて動きが阻害^{そがい}されるものは候補から除外^{じょがい}だな。

エリの方も軽装備を望んでいた。なんならお揃い^{そろ}がいいと言っているのだが、それはなるべく避けたいところだ。恥ずかしいし。

店の奥には、立派なヒゲを生やした、頑固そうな背の低い爺^{じい}さんがいた。あの背の低さとヒゲは、ドワーフだろう。初めて見たな。

俺はそこらへんに飾っている防具には目もくれず、迷いなくそのドワーフの方に向かう。防具の目利^{めき}きなんてできないから、オススめの防具を店の主人に直接聞いた方が早いと考えてのことだ。

「いらつしやい、何をお探しで？」

ドワーフの爺さんはこちらをろくに見ずに言い放つ。なんともぶっきらぼうな態度だが、気にしないことにした。不機嫌な様子ではないし、歓迎されていないような雰囲気でもないので、大丈夫だろう。

「この店にある軽装備のもので一番性能がいいやつを、男女用それぞれ欲しいんです。値段は気にしないので何かありませんか？」

「……了解だ。少し待ってな」

俺たちの方をチラリと見たドワーフは、そう言葉を残して店の奥に入ってしまった。

ガサゴソと音が聞こえてくるあいだ、陳列してある商品を眺める。品揃えはなかなかのもので、初心者向けに見える革の胸当てから豪華なつくりの金属鎧^{きんぞくよろい}まで揃っていた。

しばらくそうしていると音が止み、ドワーフの主人が両手にそれぞれ防具を持って戻ってきた。

「ほらよ。これがうちの店で扱っている軽装備の中で、一番いいやつだ。それなりの値段はするが、どうする？」

そう言っただけで俺の方に差し出されたのは、真っ赤な防具だった。

使われているのはどうやらモンスター^{モンスター}の鱗^{うろこ}のようだ。胴の部分を着てみると、動きを阻害することなくしつくり体にフィットする。ついでに籠手^{こて}や脚部も装備してみた。

着てみてわかったのだが、ただ真っ赤なだけではなく、ところどころにラインが入っていて、かなりかっこいい。籠手や脚部の着け心地にも違和感はなく、動きやすそうだ。

確かにお値段は若干張るが、せっかく装備を新調するんだからいいやつを買ってもいいよね……？

一方エリも、俺が悩んでいるうちに、試着室を借りて差し出された防具に着替えてきたみたいだ。ひらひらのスカートにギリギリの太ももライン。黒の服装と真っ白なエプロンが絶妙……ってほんとど変わっていないじゃないか!!

そう、エリに出された防具はメイド服だった。意味がわからない。ドワーフの爺さんがただ着せ

てみたかっただけなのでは？ とそちらを見るが、表情は変わらず無愛想なままだ。

見た目が見た目だけに、防御力も不安になってしまう。

「本当に大丈夫なんですか？」

「なんだ、疑うのか？ それならこの鉄の剣で軽く切ってみればいいさ。怪我するのが不安ならポーシオンを置いておくから勝手に使え」

そう言いながら鉄の剣を渡してくる爺さん。

これだけ自信満々ということは本当に安全なのかもしれないが、やはり心配だ。これで切りつけて、怪我をしたらどうするのだ。エリのことを傷つけるような真似は万が一にもしたくない。

「大丈夫ですよ、シン様。着てみた感じでは、鉄の剣くらいなら簡単に防げそうですから」

どうしたものかと悩んでいる俺を見たエリが、そう言いながら腕を出してきた。

「……本当にいいのか？」

俺の問いかけに、エリは力強く頷く。本人が大丈夫と言うなら、やってみるしかない。

「じゃあ、いくぞ」

エリの出してきた腕、手首に巻かれた布の部分に剣を当てた俺は、強く引いた。

その箇所を恐る恐る確認してみると……切れるどころか傷すらついていなかった。

驚愕している俺を見て、ドワーフの爺さんが口を開く。

「その服は、頑丈なことでは有名なオカシロハガネというモンスターから採れる糸で編みである。そんなじよそこの攻撃では傷一つつかない逸品だ。だが、その見た目のせいで買うやつがいなくてな。今回は、嬢ちゃんが元々この装備と同じような服装をしていたから持ってきたってわけだ」

このドワーフの爺さん、接客態度はぶっきらぼうだけど、わかりやすく丁寧に説明してくれるし、結構いい人なのかもな。

「俺の防具は？」

「ああ、そっちは火竜の鱗を使った防具だな。火に耐性があって軽く、何よりも丈夫だ。うちの軽装備の中じゃ、最高級のものだな」

防具について聞くと、即座に答えてくれる。やっぱりいい人だ。

俺たちは着けている防具をそのまま買うことに決めて、お金を払う。店に入る前はお揃いがいいと言っていたエリも、満足している様子だった。

「エリ、その装備でいいのか？」

「そうですね、お揃いにできなかったのは残念ですが、このデザインが気に入りました！」

エリはそう言いながら、その場でくると回った。

そんなにメイド服を気に入っていたのだろうか？

「毎度あり」



カウンターを離れようとする俺たちを見たドワーフの爺さんは短くそう言うと、もう用はないとばかりにこちらから視線を外し、新聞を手に読み始めた。この世界にも新聞があるんだなと思いがら、俺は防具屋を出る。

さあ、これで装備は整ったな。後は冒険者ギルドに立ち寄ってお世話になった受付嬢のカオルさんに挨拶してから、この街から出ることにしよう。

運が良ければスズヤさんにも会えるだろうけど……彼女は人気料理人だしAランク冒険者としても活動しているので、ギルドにいるとは限らない。もし会えなかったら、カオルさんに伝言を頼んでおけばいいだろう。

ギルドへ向かって歩いていると、道行く人がチラチラとエリを見ている。

確かにエリは可愛いし目を奪われるのもわかるが、俺の妻を不埒な目で見るやつは許せん。

ということ、視線を向けてきた男たちを軽く殺気を込めて睨みつけてやると、一瞬ビクツとした後に視線を逸らして、何事もなかったかのように去って行った。

まったく、変な虫がつかないようにしておかないとな。

ちなみに、殺気というのは比喻でもなんでもなく、MPを相手に向かって飛ばす、れっきとした技のことだ。MPを多く込めることで、相手を動けなくすることもできる。

そうしているうちに、あっという間にギルドに着いた。

ギルドの中は、まだ午前中であるにもかかわらず酒を飲んでいる冒険者がいたり、受付の前でのクエストを受けるのか考えている冒険者がいたり、いつもと変わらない風景だ。

そんな彼らの横を通り過ぎる際、俺の姿を見てぎょつとした様子を見せるやつらが多く、遠くにいるやつらも、遠巻きにこちらを眺めていた。

まるで、俺がどんな人間なのか知っているような雰囲気だ。ギルドにはほとんど来ていないはずなのに、どうしてだ？ 特に心当たりもないぞ。

考えても答えは出そうにないので、俺は周囲の視線を無視することに決めると、辺りを見渡してお目当ての人物を探し始める……と、すぐに見つかったので、そちらへと足を向けた。

「お久しぶりです。カオルさん」

「お久しぶりね、シンさん。今日はどんなトラブルを持ち込みに来たの？」

俺が受付業務をしているカオルさんに声をかけると、彼女は営業スマイルを浮かべてそんなことを言ってきた。

「いやいや、ギルドをトラブルに巻き込んだことなんてないですよ？ そもそも自分からトラブルに巻き込まれに行ったことすらないです」

「あら、そう？ 大事な大事な奴隷を連れ去られて、夜中にギルドに駆け込んだのはどこの誰でしょう？」

「それは俺ですが……この場じやたいしたトラブルなんて起こしてないでしょう？ ただ情報を聞いただけです」

「自覚はしてないようね……ギルドに入って気づかないの？ 周りから視線を感じるでしょ？」

「確かに感じてますけど」

皆が俺のことを知っているかのような雰囲気はあるが……その理由がいまいちわかっていない。

「今ね、シンさんは二人目の勇者なんじゃないかって言われているの」

「はあ!? なんてですか!？」

「ほらあなた、エリちゃんが誘拐されて駆け込んできた時、殺気を振りまいてたでしょう？ あの時のアレが原因よ。とんでもない殺気を放つて噂が広がって、もしかしたら勇者並の力を持つてるんじゃないかって言われているわ。本物の勇者があなたの店に行ったことも広まってるしね。逆に、力がありすぎるのは魔王だからなんじゃないかって言う人もいるみたいだけど……ま、今のところは勇者説が正しいとされているわ」

「正しくないです」

「でしょうね……でも、噂は一度広まったら、取り消すことはほとんど不可能よ。噂は噂として、受け入れるしかないわね」

諦めろってことか。

何一つ事実在即していない勇者説なんて、迷惑にもほどがある。さらに魔王説まであるとは……いくら焦っていたとはいえ、ギルド内で殺気を使ったのはまずかったな。

そんなことを考えながらしかめっ面をしていると、カオルさんが問いかけてきた。

「……それで、今回は何の御用で？ 記憶喪失^{きおくそうしつ}というのは嘘^{うそ}でしたと言われても今更よ」

「まだ記憶は戻っていませんよ」

俺は自分が異世界人だとバレないように、ごく一部を除いたこの世界の人たちには、記憶喪失ということにしてあるのだが……嘘がバレるのも時間の問題だと思う。

あれほど派手に店を繁盛^{はんじょう}させていたら、記憶喪失なんて言われても疑わしいよな。

「ギルドとしては、冒険者の過去に関して詮索^{せんさく}することはルール違反になるから、黙っていても結構よ。どこぞの貴族様でも、身分を隠して冒険者をしている人もいるしね」

「それなら安心ですね」

思わずそう返してから気がついた。安心して、自分は隠し事をしていますって言ってるも同然じゃないか。

それでもカオルさんは何も言わない。本当に、過去について追及しないルールがギルド内ではあるようだな。

「それで、今日来た理由ですけど。旅に出るから挨拶をしておこうと思ってきたんです」

「旅？」

想像もしていなかったようで、カオルさんは首を傾^{かし}げる。

「自分の料理を見つける旅ですね。この街じゃ手に入らない食材も見たいと思って」

この世界の食材で新しい料理を……なんて言ったらさすがに怪しまれるだろうからな。

「店はどうするの？」

「従業員に頼んできたから大丈夫ですよ」

「へえ、立派になったわねえ」

言いながら、カオルさんはエリの方をちらりと見る。

そういえばさつきからエリが一言もしゃべっていないが大丈夫だろうか。そう思って彼女の方を見ると、にっこりと微笑^{ほほえ}んでいる。ただなんとなく目が笑っていないような気がして怖かったので、手を握ってあげると頬^{ほほ}を赤くした。

「あらあら、相変わらずおアツいことね」

一部始終を見ていたカオルさんが俺たちを冷やかしてくるので、エリはますます真っ赤になってしまう。

それからは、初めて俺がこのギルドに来た時のことや、カオルさんたちを店に招待した時のことなんかを話したりして、あつという間に時間が過ぎていった。

「そういえば、スズヤさんにも挨拶しておこうと思っていたんですけど……」
「あら、そうなの？ 彼女なら、今日は街にいないはずだから会えないわね」

そうか、やっぱり忙しいのか。

「わかりました。それじゃあ、俺たちが街を出ることを伝えておいてもらっていいですか？ それと、お世話になりました、とも」

「わかったわ、伝えておくわね。でも、彼女はAランク冒険者として色々な土地に行っているから、依頼なんかで会うことだってあるかもしれないからね、その時は挨拶をしてあげなさいよ」

「ありがとうございます。もちろん、ちゃんとそうしますよ」

俺がこの街に来たのだって、スズヤさんがいてくれたおかげだ。直接挨拶しないのは薄情な気もするが、こればかりは仕方ない。いつかどこかで会えるのを楽しみにしよう。

後は……とカオルさんは言葉を続ける。

「帰ってきたら、私に料理を食べさせなさい。料理の腕がちゃんと上がったのか、見てあげるわよ」

「いや、それはカオルさんが食べたいだけじゃ……」

「見、て、あ、げ、る、わ」

俺の言葉を遮ったカオルさんは満面の笑みを浮かべているが、妙な迫力があるな。

「は、はい、わかりました」

最後の最後に料理させられる約束を取り付けられたが、カオルさんとの別れの挨拶を終えてギルドを出る。

これで、この料理の街を出る前に必要なことは終わりだな。

騎士団長で俺の店の常連のルイスにも挨拶をしておきたいが、さすがにアポもなしに会いに行くわけにもいかないから、断念する。

というわけで、門の方へと向かう俺とエリ。

門では、門番に冒険者のカードを見せるだけで街の外へ出られる。素材採取のために何度か街の外に出ていることもあって、今回も問題なく検問を通過した。

目の前に広がるのは草原。

行先である北西……魔法使いが集まるといふ噂の魔法都市アンセルブルの方角を見据えて、俺は一つ頷く。

「よし、行くか」

「はい、シン様」

エリの大きな返事とともに、俺たちは進み始めた。

しばらくのんびりと進み、街の門が小さくなって来た頃に、ふと俺は思った。

「エリ、魔法都市にはどれくらいで着くんのだ？」

俺はどのくらい離れているのか知らなかった。

「このペースですと……一ヶ月もあれば到着すると思います」

「いや遠いわ!!」

エリの返事に、思わず大声でつっこんでしまった。

一ヶ月だなんて、歩いていられない。そんなに急ぐ旅ではないとはいえ、もつとサクサク移動したいのだが……これでは、他の目的地まで回っていたらとんでもない時間がかかってしまうぞ。

「今のペースがゆつくりすぎるといいうのもありますが……馬車を使えばもっと短時間で着きますし、かなり楽になるのではないかと」

「ああ、うん。そうだね」

今更感があった。なんで気づかなかったんだ、俺。

今から街に戻って馬車を借りるというのも、何だか面倒くさい。それに、お別れの挨拶をした人に会おうものなら、気まずくなるのは目に見えている。

「どこか村はない？　そこで馬車を調達しよう」

「村ですか？　一番近いところで……ここから八〇キロほど進んだところに、アルノ村という村があるみたいです。今のペースで街道沿いに歩いて行けば、三日ほどで着くとは思いますが」俺の質問に、エリはどこから取り出したのか地図を広げて、指差しながら教えてくれる。

それにしても、一番近い村まで三日か、遠いな……

一応、テントだったり野宿の準備だったり空魔法で収納して持ってきているとはいえ、一番近い村がそこまで遠いとは思っていなかった。いや、一切下調べしてなかった俺が悪いんだけどさ。空魔法でいつでも帰れると思って気を抜いてたな。

しょうがない、いっちょ時間短縮をしますか。

「それにシン様、村に着いてもですね、馬車があるとは……キャッ」

未だに地図とにらめっこしていたエリから、可愛らしい声が漏れた。

「シ、シン様。は、恥ずかしいです」

「少し我慢しろ。このまま、移動するから」

今の俺は、いわゆるお姫様抱っこをしていた。

前に一度やった時は、あまりの恥ずかしさにエリが気絶してしまったのだが、今回は大丈夫みたいだな。

とはいえ今回もかなり真っ赤になってしまっていて、そんな姿を見ているとこっちまで恥ずかしくなる。

「い、移動なら自分でできるので大丈夫ですよ？」

「違う違う。ペースを上げるから」

エリは恥ずかしさのあまりか下ろしてくれと頼んでくるが、そういうわけにもいかない。

俺は全身にMPを纏まとわせ、身体強化を施ほどこす。

この身体強化とは、文字通り身体能力を強化する技だ。MPを纏まとうことで、攻撃力から防御力まで上昇させることができる。

今回は主に足に強化を集中し、上半身には風の抵抗を減らすために軽めに張る。そして、お姫様抱っこしているエリも囲っていく。

実はこの身体強化という技は、自分の身体以外にもMPを纏まとわせることができるのだ。

例えば、俺がメイン武器にしている、地球から創造召喚で持ってきた銃。こいつに身体強化の要領でMPを纏まとわせることで、通常の弾の威力が増し、さらにはMPを圧縮して魔力弾として撃つこともできる。

そのことが判明した際、武器にも適応するということは、防具やそれ以外でも身体に触れているものならば、身体強化の能力の効果が及ぶのではと俺は考えた。

そして実際にやってみたところ、他人でも触れている間であれば身体強化が可能になったのだ。

今回もそれを応用してエリに身体強化を施したというわけだ。何故かというところ……

「飛ばすよ」

「ま、待ってください!! そういうのはあらかじめ言ってくれないと……」

「ほれ」

「きゃああああああ!!」

エリに一声かけた俺は、右足に体重を乗せて一気に地面を蹴ける。

『走る』というよりも、どちらかといえば『飛ぶ』に近い状態で、たった一步で数メートル離れた場所に移動する。

移動しては蹴る、移動しては蹴る……と繰り返すことで、どんどん進んでいく。

さっき地図を見た感じだと、街道は曲がりくねっているところがあるため、村の方角にまっすぐ進んで行けば多少は距離を節約できそうだ。

エリは一度叫んだ後は、ぎゅっと俺の首に手を回してくっついてきた。

当然、顔と顔の距離が近づいてくる。いつもならドギマギしているところだが、俺は気にしない、

というかそんな余裕はない。何故ならば、ドギマギ以前に……

「エリ！ もう少し離れてくれ！ 苦しいから、苦しいから!!」
首を絞められていた。

そうして時々街道から逸れつつも移動を行うこと、半日。日も傾き始めようかという頃に、俺たちは目的の村の近くまで来ていた。

ここまでは他の旅人や冒険者とすれ違うこともなかったので走り続けてきたが、そろそろ人の目もあるだろうからということで、現在はエリを下ろして一緒に歩いている。

そのエリだが、大変ご機嫌ナナメなようです。

「すまない、エリ」

「シン様はもう少し私のことを考えてください。怖かったんですよ」

「時間を短縮しようと思ってやったことだったんだ……」

「まったくもう、これからはもっと私のことを考えてくださいね？」

「ああ、わかった。気をつけるよ」

「約束ですからね？」

そう言うと、エリはご機嫌な様子で鼻唄はなうたを歌い出した。

なんだかあつさりすぎる気もするが、気まずい空気のままというのも嫌なので、とりあえずよかった。

「それにしても、ここまで全く他の人とすれ違わなかったな」

「そうですね。決して人通りが多い街道ではないとは思いますが、ここまで誰もいないとは……」

「何度か街道から逸れたから、そのタイミングで気づかないうちにすれ違ってた、ってこともあるかもな……お、どうやらあれのようだな」

話しているうちに、街道の先に木の門が見えてきた。

料理の街の門に比べると、かなり小さく、村の周りの囲いも木で作られた簡単なものだ。

門の前まで移動したところで違和感があった。

「あれ、門番がいらないな……」

「門も開いたままですよ」

門の近くにいるはずの門番の姿がなかったのだ。さらに、門自体も開けっぱなしになっている。来るもの拒まず的な方針をとっている村なのかもしれないが、門番がいなのはさすがに不用心ではないだろうか。

これは、何か事件が起きているという可能性もあるな……

「ここで悩んでいても仕方ない、とりあえず入ってみるか」

「はい」

俺たちはそのまま門を潜り、中へ入って行く。

村の中、路上には誰もいない。家の中にいるのか……それとも、人間は誰もいないのか。

「シン様。ドアをノックしても反応がありません。誰もいないようです」

「そうか」

エリが何軒か訪ねてみたが、どこも一切反応がなかったようだ。

これはいいよ、きな臭くなってきたな。

「とりあえず、もう少し探索するか」

俺たちは、誰もいない村を一通り歩いてみることにした。

村といってもたいして大きいわけでもない。そう時間がかかることもなく、見て回ることができるだろう。

村の中心と思われる方向へ歩いて行くと、ここまで見てきた家よりもひときわ大きくて立派な家が見えてきた。

もしかするとこの中に人が集まっているかもしれないと思いつつ、ドアをノックしてみる。

コン、コン、コン。

「すみません。誰かいませんか？」

三秒ほど待つが返事はなく、俺はエリと顔を見合わせる。

ここにも誰もいないのか、そう思った時……

ガチャ。

ドアがいきなり開き、その隙間から鉄の兜と鎧をつけた青年がこちらを覗いてきた。

村の中でも鎧を装備しているということは、この青年は門番か何かなのだろうか。

「冒険者の方ですか？」

「まあ、一応そんなところですよ」

「……少し待ってください」

青年はそう言い残してドアを閉める。

しばらくのあいだ中から話し声が聞こえてきて、それからもう一度ドアが開けられた。

「お待たせしました。中へどうぞ」

部屋の中は人でいっぱいだった。おそらく、村中の人たちがこの部屋に集まっているのだろう。

中央にはテーブルがあり、部屋の一歩奥には中年の男性が座っている。

「前の方へどうぞ。村長が、話があるそうです」

先ほどの門番らしき青年が、奥の中年男性を手で示しながらそう言ってくる。

彼が村長さんなのか。そう思いながら俺は前の方へと進む。

部屋の中を進むたび、村人の視線が俺たちに集まる。

ギルドで皆から見られていた時とはまた違った居心地の悪さがある。全く知らない土地で、全く知らない人間から凝視されると、こんなに落ち着かないものなのか。

俺は堂々と振舞うようにしていたが、内心では動揺していた。同じく視線を集めているエリは、俺の後ろに隠れながらついてきている。

それにしても……村の人の様子が少しおかしいような気がする。なんとなく痩せ細って目が血走っているように感じるが、気のせいだろうか。

「アルノ村へようこそ、冒険者殿。私はこの村の長のウスマンです」

「お初にお目にかかります。冒険者をしているシンと申します。こちらは妻のエリです」

「シン殿、エリ殿、よくぞこの村においでくださりました。ゆっくりしてってください、と言いたいところなのですが……」

村長さんは言葉^{ことば}を濁した。何か言い辛いことでもあるのだろうか。

「何かあるのですか？」

このまま待っていても埒^{うち}が明かなさそうなので、こちらから聞いてみる。

「……ええ、せっかく村に来てくださった方にお聞かせするような話ではないのですが、聞いていただけますでしょうか」

村長さんはそう前置きして、この村の状況を教えてくれた。

周りの村人たちを見て、なんとなく予想をしていたが、まさに想像通りだった。

簡単に話をまとめると、この村は現在、深刻な食料不足に陥^{おちい}っているとのことだった。

備蓄^{びちく}してある食料を村人全員に配っても、せいぜい三日持つかどうかの瀬戸際^{せとぎわ}。

これまでもかなりギリギリな食生活を送っていたようで、満足な食事を取れていなかったようだ。村人たちがどこか痩せ細^{やせ}って見たのは、そのせいだった。

いくらなんでも貯蓄が少なすぎる気がするが、なんでも理由が二つあるらしい。一つ目はモンスターによる食料の強奪、二つ目は貴族による徴発^{ちようはつ}だ。

どうやらそのモンスターは、人間は襲わずに食料のみを奪っていき、積極的に攻撃してくることはないらしい。動きも素早く、平然と柵^{さく}を乗り越えていくそうだ。村人も警戒しているものの、襲撃は夜に多く、闇夜^{やみよ}に紛^{まぎ}れて食料を奪われる、ということを繰り返していて、つい昨日もいつの間にか奪われてしまったと言っていた。

話を聞く限りは猿っぽい印象だが、猿の魔物とかなのだろうか？

貴族の方は、お金も払わずに食料をかつさらって行くようだ。基本的に自給自足の体制を取っているこの村にとって、こうした微発^{みはつ}は致命的だ。しかも今回は、普段以上に食料を持っていかれた上に、人手不足だと言って村の男性の大多数を連れて行ってしまったらしい。先ほどの鎧の青年だ

けは門番ということで連れていかれなかったが、その他に残っている男は老人と子供、または持病のある者ばかり。こうなってしまうては狩りにも行けず、街道の危険性から街への買いつけも行けずと、食材を調達する手段が失われてしまっている。

貴族のところへ抗議しに行くのはそう簡単なことではないし、さらにその貴族が用心棒としてAランクの冒険者を雇ったという噂もあり、諦めるしかないようだった。

そしてこの先どうするのか、この村長さんの家に村人全員で集まって会議しているところに、俺が現れたというわけだ。

話を聞き終えた俺は、顎に手を当てながら考え込む。

「なるほど、そういうことでしたか……」

「シン様、なんとか助けてあげられないでしょうか」

エリが俺の服の袖を引つ張りながら、小声で告げてくる。

そんな俺たちの様子を見た村長さんは、拳を握りしめながら頭を下げてきた。

「シン殿、大変言い難いことではありますが、どうか、食料を恵んでくれませんか？」

「いいですよ」

「そうですよね、それはさすがに……えっ？」

村長さんは、俺の返事が想像していたものと違ったようで、聞き返してきた。

「いいですよ。食料を提供します」

「あ、ありがとうございます！ ですが本当にいいのですか？」

「はい。ただ、条件があります」

ここで見返りなくお願いを聞いてあげるほど、俺はお人好しじゃない。というわけで、無理のなさそうな範囲で条件を出すことにする。

「その条件というのは？」

「お金はいらないので、馬車と馬をいただきたいんです」

おずおずと聞いてきた村長さんに、はっきりと要件を伝える。

そう、そもそもこの村に来たのは、馬車を確保するためだ。

村に着いたはいいものの、どうやって手に入れるのか考えていた俺にとって、この展開は非常に好都合だった。

普通に買おうと思っはいたが、食材を提供するだけでいいなら、創造召喚で持ってきたものを渡せばいいのだから、実質タダだ。地球の食材だけでは怪しまれるだろうから、料理の街で仕入れて空間魔法でストックしてあるこの世界の野菜たちも一緒に出す必要があるかもしれないが、その仕入れ値だって、今の俺の財産からすれば大して痛くない。それに、これだけ困窮している人たちからお金をもらうのも罪悪感があつた。

ちなみに、この村へと移動している最中、創造召喚を使って地球から馬車を持ってくることも考えた。

ただ、馬車だけ召喚しても引いてくれる馬がいなし、地球の馬車がこちらと全く同じとは限らないので、下手をすれば大騒ぎになりかねない。というか、そもそも馬車について詳しくもないため上手くイメージできないだろうから、持つてくることは不可能だろう。

「あの……一ついいですか？」

俺の要求を聞いた村長さんは、一瞬固まった後、手を挙げて聞いてきた。

「どうぞ」

「馬車はお持ちでない、ということですか？」

「はい？ 持っていないですよ？ なので欲しいのですが……」

どういうことだ？ 俺は村長さんの質問の意図がわからなかった。

持っていないから欲しいと言っているのに、何故そんな質問を……

村長さんは一度目を閉じると、先ほどの鎧の青年に声をかける。

「カイ。この人たちを帰らせてくれ」

「わかりました」

あの青年、カイって名前なのか。いや、そんなことより、今なんて言った？

俺が目を見開いていると、カイがこちらへと向き直って口を開く。

「すみません、シンさん。この村からすぐに出て行っていましたでしょうか」

「どうしてです？」

急な申し出に、俺は困惑してしまう。さつきまでは歓迎ムードっぽい雰囲気だったのに、急にどうしたんだ。

「それは、シンさんには食料がないからです」

「いえ、持っています……」

「おそらくお持ちの荷物の中に入っているのでしょうが、一人二人分ではダメなんです。せめて、この村の全員に配れるくらい、欲を言えば一週間分はないと……」

そこまで言われて、俺はようやく村長さんが急に態度を変えた理由がわかった。

そうか、俺たちが食料を持っていないと思われているのか……確かに、馬車もない以上は今の手荷物が全ての荷物だと思われてもしょうがない。

そんなやつが食料を提供すると言ったって、たいした量を持つているわけがないのだ。しかも、見返りとして馬車と馬を要求されても、釣り合いが取れるわけがない。

「村長さん」

「なんでしょうか、シン殿……たとえ脅されても、村の代表として引きませんぞ」

どんな風に思われているんだ俺は……

「少し時間をいただいてもいいですか？　俺たちが食料を持っている証拠をお見せしますので」

俺はそう言って、エリを連れて家を出る。

村人たちは怪訝^{けげん}そうな表情を浮かべているが、気にしない。

そのまま、村長さんの家のドアや窓からは絶対に見えない位置まで行ったところで、俺は創造召喚を発動した。

今回持ってきたのは、ジャガイモや玉ねぎ、肉など、この世界でも似たようなものがある食材だ。怪しまれないように、この世界の野菜なんかもしっかりと混ぜておく。

「エリ、一緒に運んでくれ」

「はい」

とりあえず二人で運べる分だけ出したところで、村長さんの家に戻ることにした。

「お待たせしました」

「何……が……」

大量の食材を持って入ってきた俺たちを見て、村長さんが絶句する。

ついさっきまでたいした荷物を持っていなかった俺たちが、こうも大量の食材を持ってきたのが信じられないのか、村長さんが固まっていた。他の村人たちも、目を見開いて驚いている。

「これでもダメでしょうか？　必要であればまだまだあるのですが」

食材を机にドサツと置いた俺は村長さんに問いかけた。

村長さんはハツと我に返ったかと思うと、ぶつぶつと呟きながら考え込み始める。

周りにいる村人たちはその様子をじっと見ているが、誰もしゃべらないせいで妙な圧迫感があって息が詰まりそうだ。

「馬車がないと言っていたのに、これだけの量をどうやって……いや、聞かないほうがいいでしょうね」

村長さんは首を振ってため息をつく。

「そうですね、冒険者には、一つや二つ秘密があるものですから」

「ええ……しかし、見たことない食材もあるようですね。タマクなんかに似ていますが、コレは……？」

そう言いながら村長さんが指差したのは、地球から持ってきた食材——玉ねぎだった。さすがに気づくか。

「詳しいことは秘密ですが、珍しい品種というだけで、タマク的一种ですよ」

まあ、味なんかも微妙に違うはずだけどな。

「そんなものまでお持ちなのですか……それにまだ食材があるなら、一週間は持ちそうじゃない

か……？ それなら当初の予定通り依頼をしても……」

村長さんが再び、ぶつぶつと呟き始める。

なるほど、ようやく話が見えてきた。

「ええ、まあ。それで、これからのことですが……一週間、俺たちのことを雇いませんか？ 元々、そうするつもりだったのでしょうか？」

急な申し出に、村長さんは驚いた表情を浮かべる。

ついさっきカイが言った一週間分という言葉、そしてたった今の村長さんの言葉にピンときたのだ。

元々村長さんは俺たちを雇い、街にまで買い付けを頼む予定だったのではないかと。

彼らが気にしている一週間というのはおそらく、街へと食材を買い付けに行くのに必要な日数だろう。街までは徒歩で三日の距離だから、行って買い付けをして戻ってきて、大体一週間だ。馬車ならもっと早いかもしれないが、道中何があるかわからないから、余裕を見て一週間、というわけだな。

つまり彼らは、俺たちから一週間分の食材を買い、その後、別の依頼として食材の買い付けを頼むつもりだったのだろう。

そのことを伝えると、村長さんは頷いた。

「ええ、まさにその通りです」

よかった、予想が的中したみたいだ。

ただ、これだけは言っておかないといけないな。

「ただし、買い付けはそちらのカイさんをお願いしてください。俺たちが行ってしまうと、この食材を見たことない方はどう調理すればいいかわからないでしょう？ 俺は冒険者ですが、料理人でもあるので、皆さんに教えながら調理すればいいと思うんです」

実際のところ、空間魔法を使えば一瞬で料理の街まで行って戻ってこられるが、そんなことをしたら怪しまれるのは目に見えている。

創造召喚で持ってきた食材を大量に売りつけることも一瞬考えたが、そんなことをしたら秘密がバレてしまうからできない。

「ふむ」

俺の提案に、村長さんは顎に手を当てて考え込む仕草を見せ――

「ぜひ、雇わせてください」

にっこりと笑って手を差し出してきた。

「交渉成立ですね」

俺も微笑みを浮かべ、差し出された手を強く握るのだった。

私、ウスマンは、村人全員を我が家に集めた会議を開いています。

現在村にいる人数はそう多くないため、一部屋に集めることができました。

いくら私が村長とはいえ、なんでもかんでも勝手に決めるわけにはいきません。特に重要な決定をする時は、こうやって村人を集めて会議をするのが、この村に代々続く伝統なのです。

しかし今回の議題は、どうしても難しい要件でした。

「食料が三日しか持たないんじゃないぞ!! 今すぐに街に買い出しに行くべきじゃ!!」

「しかし、行くにしても、戻ってくるのに一週間もかかる。その間はどのぐんだ!! それに、今この村にいる人間でまともに戦えるのはカイだけだぞ!! カイを買い付けにやったとして、村の護衛はどうするんだ?」

「食料については、節約してどうにかやるしかない。村の護衛の方は、そうそう襲われる心配はないから大丈夫だ」

「節約して三日しか持たないのに、一週間も待てるのか? 大体、つい昨日食材を奪われたばかりだったのに、襲われる心配がないなんてよく言えるな! それならば、カイには村にいてもらっ

て、ここを通る商人や冒険者に買い出しを頼んだ方が得策だ」

「それこそ、通るかかわからない者たちを待つだけじゃないか! どこが得策なのだ!!」

「しかし……」

こうして村の者たちの言い争いが続いています。

私は村長という立場である以上、両方の意見をしっかりと聞き、どう行動すれば村の人たちを守るのか考えて決断しなければなりません。が、確かにどちらの意見にも一理あるため、判断に迷うところです。

私個人としては、冒険者も商人も通るかからずどうしようもなくなる、という最悪の事態を避けるためにも、すぐにでも買いに行かせるべきだと思っています。ただ、その間に村が襲われてしまっただけというわけでもない。

とはいえ、カイ以外が買い付けに行くのは現実的に厳しいのです。今村に残っているほとんどの者は戦えないため、道中で襲われようものなら、抵抗すらできず、そのまま帰ってこれなくなる可能性だってあります。

ですが、ずっと悩んでいるわけにもいきません。ここは村長として、多少強引でも決断すべき場面なのでしよう。

そう考えた私は、場を収めるために口を開きます。

「皆、私の話を……」

コンコン。

「誰かいませんか？」

丁度その時、ドアがノックされました。

ドアの近くにいたカイに出るように目線を送ると、一つ頷いた彼はドアを少しだけ開きます。その後、外にいた誰かと一言二言話をしたカイは、いったんドアを閉めてこちらへと歩いてきました。

「冒険者が二人来ております。一人は真つ赤な防具をつけた男性。もう一人はメイドでした」

「メイドか……派手な格好みたいだし、どこかのお坊ちゃまか？」

「いえ、そんな風には見えませんでした……それに、むやみやたらに暴れ回るような人間にも見えませんでした」

その言葉を聞いて、その冒険者を迎え入れるか、私は悩みました。

冒険者といえは野蛮な人間が多いイメージがあるため、慎重にならざるを得ないのです。不用心に招き入れて、暴れられてはたまりません。

ただ、カイの言葉を信じるならば、そんな人間には見えないそうですね。

「……いいでしょう。案内してください」

若干悩みましたが、このまま彼らを追い返したからといって村の状況が良くなるわけではないので、迎え入れることにしました。

もしかしたら、買い付けを頼んだり、食材を分けてもらえたりするかもしれないという、淡い期待を込めて……

私の言葉に頷いたカイは、ドアを開けて二人の冒険者を招き入れます。家の中に入ってきたのは、言っていた通りの若い男性とメイドで、人が好さそうな見た目でした。

まずは挨拶を交わし、名前を教えてもらったのですが、終始丁寧な対応で、非常に好感が持てます。

本来なら村を挙げての歓迎をしたいところですが、村の現状を伝え、一縷の望みをかけて、食材を分けてもらえないか頼むことにします。

「シン殿、大変言い難いことはありませんが、どうか、食料を恵んでくれませんか？」

「いいですよ」

「そうですね、それはさすがに……えっ？」

正直、断られると思いながらお願いしていました。何せ、お礼のことに言及していないのです。そんなお願い、怪しすぎて普通は断るか、お礼について聞いてくるはずです。

しかし、蓋を開けてみれば即答で承諾してくれたのです。私は少し困惑してしまいました。

「いいですよ。食料を提供します」

「あ、ありがとうございます！ ですが本当にいいのですか？」

「はい。ただ、条件があります」

条件。向こうから見返りを求めてきました。

なるほど、そのための即答だったのでしよう。お願いを聞いてやると先に明言することで、自分の要求をこちらに通すつもりなのです。

しかし、その条件次第では帰ってもらう必要が出てきます。大量の金銭などを要求されても、支払うことはできません。買い付けに行くために貯めてきたお金はありますが、そのお金を渡してしまえば**ほんまつらんちう**です。

私は少し声を硬くしながら、シン殿に問いかけました。

「その条件というのは？」

「お金はいらないので、馬車と馬をいただきたいんです」

お金はいらないという言葉に、私は思わずほっと息をつきました。

そして、馬車と馬の要求。これ自体は、難しくない条件です。村の中には何台か使っていない馬車がありますし、馬も都合することはできます。

ただ、こんな要求をしてくるというのは、目の前にいるシン殿が、現時点で馬車を持っていな

いということです。これは大きな問題でした。

「あの……一ついいですか？」

「どうぞ」

「馬車はお持ちでない、ということですか？」

「はい？ 持っていますよ？ なので欲しいのですが……」

念のため確認を取った私は、シン殿に帰ってもらうことをすぐに決断しました。

ここまで馬車なしで来たということは、今持っているものが荷物の全てということでしょう。

そうなると、たいした量の食料を持っているとは思えません。彼ら自身も必要とすると考えると、渡してもらえる食料はかなり少ないはず。その程度の食料と、馬車と馬を交換したところで、こちらにとっては損でしかありません。最低でも村人全員に行き渡らせることができる量がないと意味がないのです。

そう考えた私は、カイを使って彼らを帰らせようと思いました。

ですが、シン殿はカイの口ぶりから、私が何を言いたいのかわかったようです。

「村長さん」

「なんででしょうか、シン殿……たとえ脅されても、村の代表として引きませんぞ」

私は村長として、この村を守らねばなりません。時には厳しく決断し、絶対に引かないという覚

悟を示す必要があります。それが、村長の責務だと考えています。

「少し時間をいただいてもいいですか？ 俺たちが食料を持っている証拠をお見せしますの」

シン殿はそう言い残して、エリ殿を連れてドアから出ていかれました。証拠とは一体なんなのでしょうか？

部屋の中に妙な沈黙が流れつつも、しばらくすると、シン殿が食料をたくさん持ってきました。馬車は持っていないと言っていたにもかかわらずです。

その量は、手荷物のバッグに入るであろうよりも、明らかに大量でした。しかもまだまだあると言っのです。

私は、いえ、その場にいる村人全員が、驚きのあまり言葉を失っていました。

これでもダメでしょうか？ とシン殿に聞かれて我に返りましたが、正直なところ目の前の現実が信じられません。実は超高級な大容量の魔法袋を大量に持っているとか、彼が空間魔法の使い手だとか、ありえない可能性ばかりが、ぐるぐると頭の中を巡^{めぐ}っていきます。

「馬車がないと言っていたのに、これだけの量をどうやって……いや、聞かないほうがいいでしょうね」

あまりに異常な事態に、私はため息をつくことができませぬ。

「そうですね、冒険者には、一つや二つ秘密があるものですから」

出所はどこなのか……思わず問いただしくなってしまうましたが、直前で思い直しました。

このことは、追及するべきではないでしょう。お金も要求せず、これだけ食材を提供すると言ってくれているのに、秘密を暴こうとするような真似はしない方が得策です。

そう考えて、机の上の食材を見ていると、あることに気がつきました。

「ええ……しかし、見たことない食材もあるようですね。タマクなんかに似ていますが、これは……？」

よく見るとそれらの食材の中には、見たことのないものが数種類混ざっておりました。

私が普段料理をしないため、馴染^{なじ}みがないだけかとも思い、料理に慣れているはずの女性陣の方を見てみたのですが、首を傾げているようでした。

「詳しいことは秘密ですが、珍しい品種というだけで、タマク的一种ですよ」

私の質問に、シン殿が答えてくれました。

そんな珍しいものを持っていることに驚きを隠せない私は、思わず言葉を零してしまいます。

「そんなものまでお持ちなのですか……それにまだ食材があるなら、一週間は持ちそうじゃないか……？ それなら当初の予定通り依頼をしても……」

そんな私の呟^{つぶ}きが聞こえたのか、シン殿はある提案をしてくれました。

「ええ、まあ。それで、これからのことですが……一週間、俺たちのことを雇いませんか？ 元々、

そうするつもりだったのでしょうか？」

私はその言葉を聞いて、今日何度目になるかもわからないほど驚いてしまいました。

「ええ、まさにその通りです」

何故、私が考えていたことがわかったのでしょうか。確かに私たちは、食料を恵んでもらった後、買い付けまで依頼するつもりでした。シン殿はこちらが想定していた流れを、そっくりそのまま言い当ててしまったのです。

「ただし、買い付けはそちらのカイさんをお願いしてください。俺たちが行ってしまつと、この食材を見たことない方はどう調理すればいいかわからないでしょう？　俺は冒険者ですが、料理人でもあるので、皆さんに教えながら調理すればいいと思うんです」

「ふむ」

シン殿の言葉に、私は顎に手を当てました。

シン殿の言う通り、当初は彼に料理の街まで戻ってもらうと考えていました。

というのは、この村でまともに戦えるのは、門番のカイのみ。その彼がこの村を離れてしまつのは、できるだけ避けたかったからです。

しかし、シン殿が見たことのない食材を持ってきたのは予想外でした。この食材を美味しく食べるには、彼の力が必要でしょう。

加えて、シン殿は冒険者でもあるので、カイの代わりにこの村をしっかり守ってくれるかもしれません。

そういったことを考えると、シン殿に残ってもらうのがベストな方法なのでしょう。

これだけメリットがあるならば、彼の言うことを聞いておいた方がいいと、私は判断しました。

「ぜひ、雇わせてください」

私はそう言いながら、彼に手を差し出します。

「交渉成立ですね」

シン殿はしっかりと、私の手を握ったのです。

3

「では、さっそくですが……丁度夕飯のタイミングですから、料理を始めましょうか。皆さんも待ちきれないようですし」

村人たちの視線は、テーブルの上の食材に釘付けくぎつけだった。

満足できるほどは食べていなかっただろうから、仕方がない。